

宇木汲田貝塚 : 1966・1984年発掘調査の再整理調査 報告書

宮本, 一夫
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

松本, 圭太
九州大学大学院人文科学研究院 : 学術研究員

高宮, 広土
鹿児島大学総合科学域総合研究学系 : 教授

上條, 信彦
弘前大学人文社会科学部 : 教授

他

<https://hdl.handle.net/2324/4372000>

出版情報 : 2021-03-25. 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
バージョン :
権利関係 :



口部には菜畑遺跡が位置する。縄文海進（7000B.P.）の頃は、本丘陵の山麓線付近まで海が侵入しており、曾畑式期の菜畑遺跡は当時の海岸線附近にあったと推測されている（井関1982）。

c) 背振山地西部は唐津平野の東側にあたり、西北端の鏡山は標高283.56mである。一方で、唐津市東南の山並は700m程度である。唐津平野に近い部分の地質は主に風化の進んだ花崗岩類からなり、平野の基盤の大部分もこの延長部にあたる。宇木汲田遺跡は当該山地に囲まれ、鏡山の南に位置する。

d) 唐津平野は、上記の a) 東松浦溶岩台地、b) 松浦杵島丘陵地、c) 背振山地西部に囲まれた松浦川および玉島川の沖積低地の総称である。松浦川は唐津平野を流れる最大の川で、延長は46km、流域面積は341km²に及ぶ。武雄市北西部に源を発し、巖木川や徳須恵川と合流、平野部で川幅を広げつつ唐津湾に注いでいる。玉島川は背振山地から南に流れ、馬川付近で流れを西へ変えて唐津湾に至る。『万葉集』、大伴旅人の歌にみえる松浦川は、玉島川を指していたといわれる。唐津平野には、湊、虹ノ松原のほか、鏡、原、中原附近に砂丘が形成されている（鏡-徳武砂丘列）。鏡-徳武砂丘列は、本報告の中心的時期となる弥生早期の遺跡形成において重要である。最終氷期の最寒冷期後、約19,000B.P. から始まった海面上昇は、有楽町海進や縄文海進と呼ばれている。約7000B.P. では、現在に比べて海面が2～3m高くなり、日本列島の各地に複雑な入り江をもつ海岸線が形成された。その後、海面の低下とともに、砂丘列とその背後に後背湿地が形成されることになったのである。鏡-徳武砂丘列は縄文時代中期に形成され、中期末頃には植生が回復して縄文人が活動できる環境にあった（小松・美浦2008）（図2）。宇木汲田貝塚の位置する宇木川・半田川流域の広い後背湿地は、本砂丘列によって形成されている。本貝塚を含む同時期の遺跡が多く分布していることは、本後背地が水稻農耕の初期段階において重視されていたことを示している。玄界灘に面する沿岸部は、伊万里湾から東松浦半島にかけてはリアス式海岸、唐津湾では砂浜海岸が形成されている。名勝地である虹ノ松原を含む海岸砂丘

は、海岸線の後退により上記旧砂丘の発達が進んだ後、4～5世紀頃からの海面の再びの上昇によって形成された（井関1982）。

e) 島嶼部の地質は大きく2つに分けられ、上場台地と同一の地質である島（神集島、馬渡島など）と、背振山地系の花崗岩類に上場台地と同一の玄武岩溶岩でおおわれた高島や大島がある。東松浦半島北端の呼子から釜山までは約190

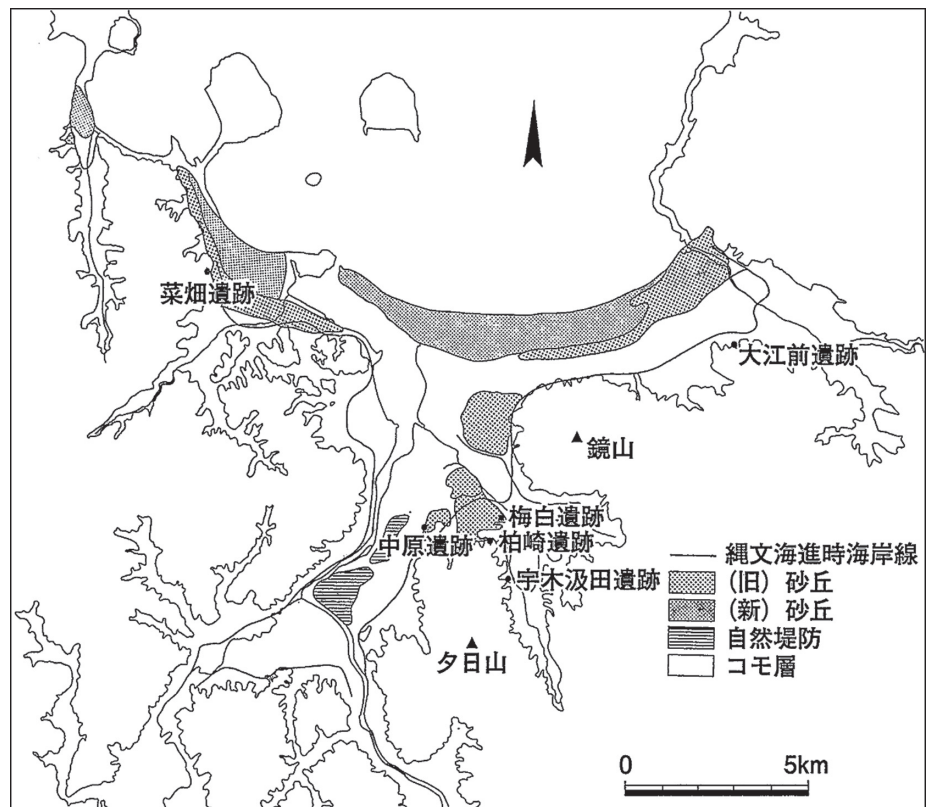


図2 唐津市周辺における砂丘

kmであり、これらの島嶼さらには壱岐や対馬を伝って、大陸までの航行が可能であった。このような、いわば東アジアに向かって開かれた立地であったこと、そして後背湿地という初期の水稻農耕に適した環境が、弥生時代の開始を告げる本遺跡形成の重要な要因であったと考えられよう。

2. 歴史的環境

唐津平野周辺における旧石器時代から縄文時代の遺跡は上場台地を中心に確認されている。ナイフ

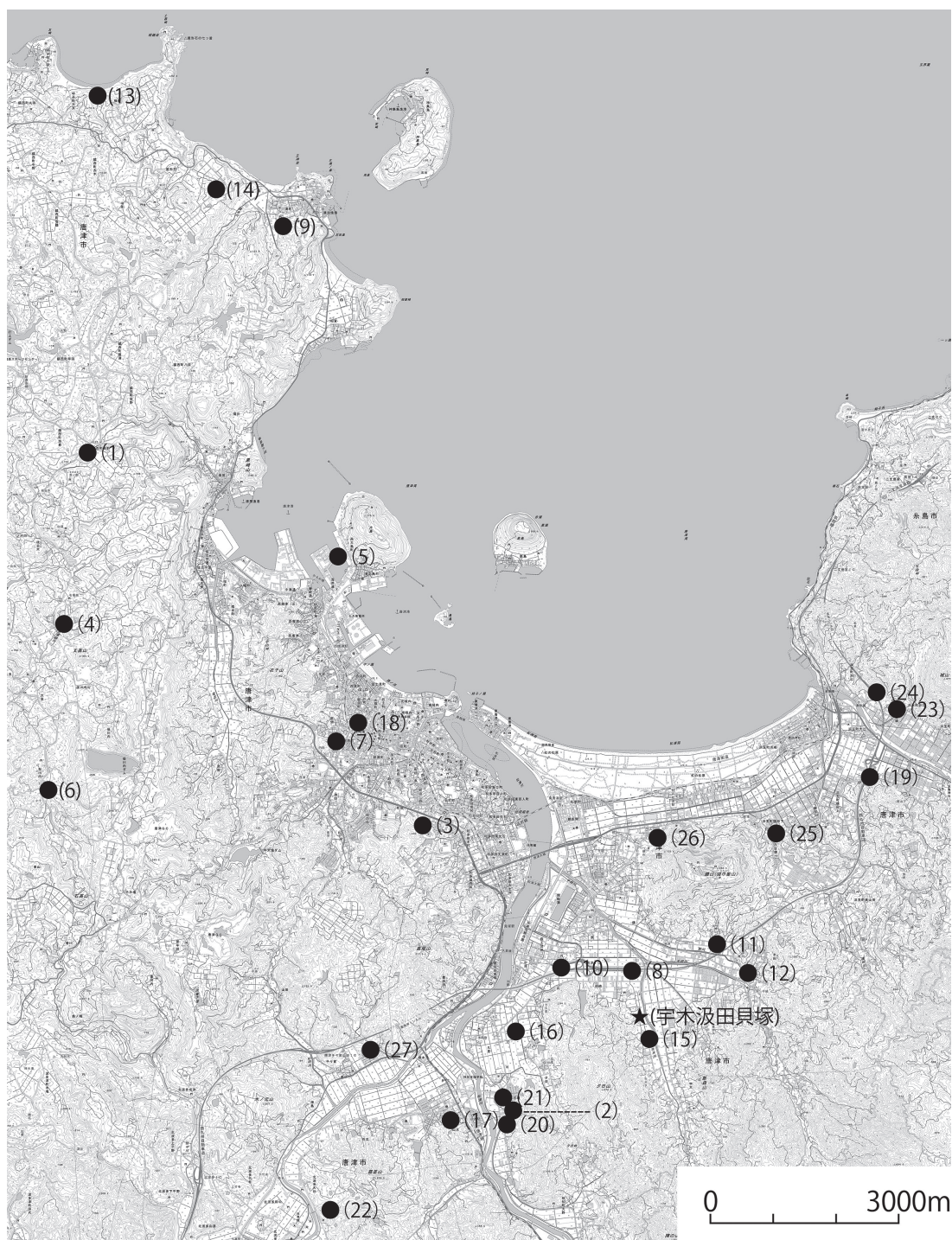


図3 唐津平野における遺跡分布

形石器文化期に相当する磯道遺跡（堀川1981）、生石遺跡（佐賀県教育委員会1978）のほか、細石器文化の原遺跡（1 * 図3の番号に対応）（杉原・戸沢1971）が知られている。縄文時代草創期から早期の遺跡としては、双水迫遺跡（2）、コクダシ遺跡（3）があり、細石器も出土している。中尾二ツ枝遺跡（4）（唐津市教育委員会1992）は比較的規模の大きな遺跡として知られる。低地部の遺跡としては、前期の土器を出土した西唐津海底遺跡（5）（松岡・森1982）が知られる。中期後半から後期の遺跡は上場台地では少ないが、晩期前半以降、遺跡数が増大し、梨川内村前遺跡（6）（唐津市教育委員会1996）などがこの時期にあたる。沿岸部に立地する遺跡としては、後期中葉から後半にあたる湊松本遺跡（9）（唐津市教育委員会1995）が挙げられる。

上述のように、縄文海進以降、砂丘列およびその背後における後背湿地の形成がすすみ、水稻農耕に適した環境が整うこととなった。これは、縄文時代晩期から弥生時代の遺跡が唐津平野において著しく増加したことの基礎となっている。著名な菜畑遺跡（7）（唐津市教育委員会編1982）では我が国最古の水田跡が検出されたが、本遺跡は唐津市街地の南部砂丘列に立地する。宇木汲田遺跡の位置する宇木・半田川流域は、唐津平野において調査が比較的密になされ、重要な遺跡も多い。先述のように、鏡・徳武砂丘列は、その後背湿地における縄文時代晩期以降の遺跡の形成に重要な役割を果たした。本砂丘列上に位置する梅白遺跡（8）（小松ほか2003）、中原遺跡（10）は、砂丘列の形成期を示す遺跡として重要である。このほか、宇木・半田川流域の縄文時代の遺跡として鏡山南麓の井ゲタ遺跡（11）（前期から後期）（小松ほか2000）、半田川上流の天神ノ元遺跡（12）（後期）（仁田坂2004）が知られる。唐津平野以外の上場台地の先端にも、大友遺跡（13）や透雲遺跡（14）が存在した。前者では弥生時代早期の支石墓から甕棺墓、箱式石棺墓への変化が明らかになった（宮本編2001・2003）。雲透遺跡では、弥生中期を中心とする生活遺構が検出されている（唐津市教育委員会1998）。

弥生時代の唐津平野の遺跡は、各河川がつくる沖積地ごとにまとまっている。宇木汲田貝塚（★）の位置する宇木・半田川流域については後述するが、貝塚に隣接する宇木汲田甕棺墓地（15）においては数多くの青銅器が確認されている。一方で、松浦川流域では弥生時代中期の甕棺墓や鋳型片を出土した中原遺跡（10）（小松ほか編2010）が挙げられ、続く中期後半以降では、鉛製矛、銅矛、銅戈を出土した久里大牟田遺跡（16）（中島1982）、細形銅剣と勾玉、管玉を持つ甕棺が発見された山本遺跡（17）（岡崎1982b）が示すような、厚葬墓が出現した。菜畑遺跡と同じく町田川流域に位置する桜馬場遺跡（18）では、弥生時代後期の甕棺墓から方格規矩鏡、巴形銅器、有鉤銅釧などが出土した（岡崎・木下1982）。このように、唐津平野の厚葬墓は、松浦川流域、宇木・半田川流域、町田川流域に広がっている。玉島川流域には五反田支石墓（渡辺1982a）のほか、水田関連施設が検出された大江前遺跡（19）が所在する（小松ほか編2006）が、上述の諸流域に比して弥生時代の遺跡は少ない傾向にある。終末期以降の厚葬墓としては、破碎鏡を副葬した墳丘墓や木棺墓が発見された、松浦川流域の中原遺跡（10）（小松ほか2012）が挙げられる。

古墳時代の松浦川流域における前方後円墳としては、双水柴山2号墳（20）（唐津市教育委員会1987）、久里双水古墳（21）（宮本・田島編2009）、中原遺跡（10）ST12032（小松ほか2012）が挙げられる。古墳時代初頭の双水柴山2号墳は全長34.7m、主体部は木棺である。久里双水古墳は全長約90mで、竪穴式石室から盤龍鏡、碧玉製管玉、棺外から刀子が出土した。墳丘上に葺石や段築を持たない等、地域色の濃さが指摘されている。松浦川支流の徳須恵川流域には、竹の下2号墳（22）が築造され、全長52mを測る（陣内2008）。前期後半以降、松浦川流域での前方後円墳の築造は一旦途絶え、4世紀後半には玉島川流域において谷口古墳（23）が築かれる。谷口古墳は組合わせ式の長持形

石棺を主体部にもち、仿製三角縁神獸鏡、碧玉製石釧など畿内の要素を持っている（亀井・永井1982）。谷口古墳の500m程下流では、仁田埴輪窯跡（24）（三浦ほか2010）が発見されている。その後、初期横穴式石室をもつ横田下古墳（25）（小田1982）や、金銅製冠や銅椀などの渡来系遺物を副葬した島田塚前方後円墳（26）（岡崎・本村1982）が造られている。

『肥前国風土記』によると、唐津平野に郡衙が存在しているが、この候補とされているのが、千々賀古園遺跡（27）と中原遺跡（10）である。松浦川左岸に位置する前者では、L字形配列の掘立柱建物群や、多くの奈良時代の墨書土器が確認された（唐津市教育委員会1991）。後者は松浦川を挟んで対岸に位置し、木簡のほか官衙を連想させる内容の墨書土器、硯、灰釉陶器などが出土した。木簡では、史料にも見られる「大村」「川部」などが判読された（小松ほか2007）。

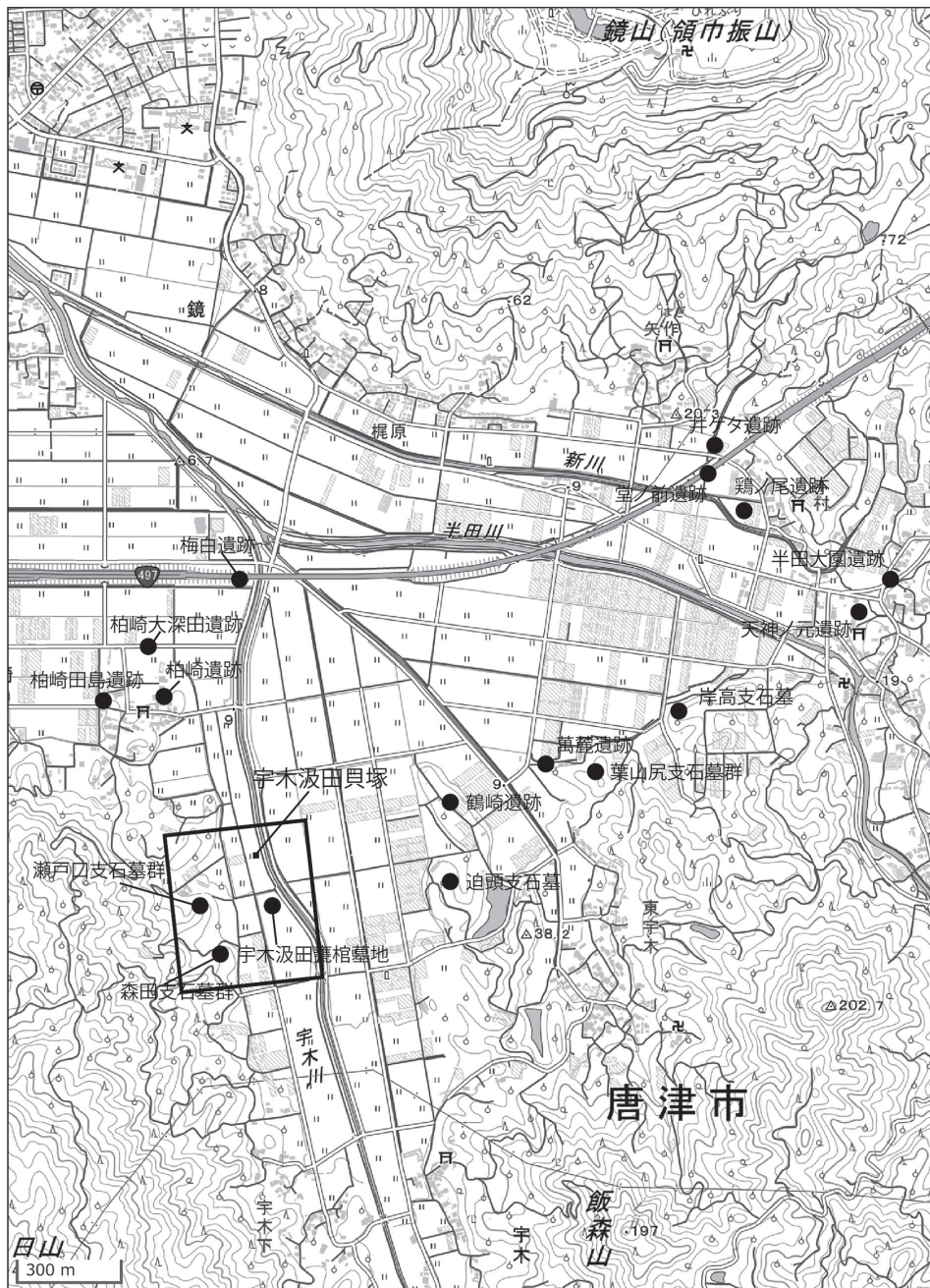


図4 宇木波田貝塚と周辺遺跡

3. 宇木・半田川流域の遺跡

以上が旧石器時代から古代に至る唐津平野の概観であるが、宇木汲田貝塚の位置する宇木・半田川流域における弥生時代の遺跡について次に概観する（図4）。宇木・半田川流域の遺跡群は、いくつかの纏まりに区分できる。本貝塚が所在するのは夕日山の東北部から延びた丘陵の前面であり、本丘陵とその周辺に関しては次節で説明したい。

夕日山北麓の丘陵先端には、明治末年に触角式銅剣、中細形銅矛、勾玉が出土した柏崎遺跡（岡崎1982a）が所在するほか、柏崎田島遺跡では前漢鏡を副葬する甕棺墓が見つかった（佐賀県教育委員会1980）。柏崎大深田遺跡では広形銅矛の鋳型が出土した（佐賀県教育委員会1980）。さらに北側の平野部には、先に挙げた梅白遺跡があり、水田痕が検出されており、その埋没時期は板付Ⅰ式の段階と考えられている（佐賀県教育委員会2003）。

宇木汲田遺跡から宇木川を挟んで東側の洪積台地に、鶴崎遺跡を含む鶴崎台地が立地する。鶴崎遺跡では、特異な形態をもつ有柄銅剣（宮本2021）が見つかり、他に迫頭支石墓も所在する。鶴崎台地の東側の台地にもう一群の遺跡があり、葉山尻支石墓群や萬麓遺跡が所在する。葉山尻支石墓群では支石墓のほか、碧玉製管玉あるいは鉄片をもつ甕棺墓が検出されている（渡辺1982b）。萬麓遺跡では住居址および甕棺墓数十基が発見された（佐賀県教育庁文化課1974）。

鶴崎台地より丘陵伝いに東へ進むと半田川上流であり、天神ノ元遺跡や半田大園遺跡が立地する。天神ノ元遺跡で出土した金海式の甕棺には「シカ」や「J」状の線刻がみられ、国内最古段階の絵画土器の一つとされている（唐津市教育委員会2004）。半田大園遺跡からは鏡片や管玉が出土し、弥生土器では丹塗磨研土器の割合が大きい。これらの遺跡から丘陵沿って西北方向に鶏ノ尾遺跡があり、甕棺墓群が調査された。

鏡山南麓には井ゲタ遺跡、堂の前遺跡が所在する（佐賀県教育委員会2000）。両遺跡は本来一体をなすもので、弥生時代中期を中心とした集落、墓地、畦畔状遺構が確認され、同時期の甕棺墓18基が調査された。これらの中には勾玉や碧玉製管玉を副葬するものを含んでいる。このように、宇木・半田川流域では、宇木汲田遺跡を含む上述の各遺跡群が沖積地を取り囲むように、丘陵の縁に沿って立地していたことが読み取れよう。この状況から、『魏志』「倭人伝」にみられる「…有四千餘戸、濱山海居。」という末廬国の記述が思い起こされる。宇木汲田貝塚が形成された時期は、『魏志』を1000年程度も遡るが、このような後背湿地を狙った立地の集落群が、我が国初期の水稻農耕の姿を示していると考えられる。

4. 宇木汲田貝塚と周辺の遺跡

夕日山東北の丘陵には森田支石墓群、瀬戸口支石墓群があり、その前面にあたる宇木川西岸の宇木汲田貝塚およびそれに南接する宇木汲田遺跡（甕棺墓地）と纏まりをなしている（図5）。宇木汲田甕棺墓地は、森本六爾氏や龍溪顕亮氏によって紹介され、その後、東亜考古学会、日仏合同、佐賀県教育委員会、唐津市教育委員会によって墓域の大部分が調査されている。結果、甕棺墓129基、土壙墓、石棺墓、木棺墓が発見されており、多鈕細文鏡、細形銅剣、細形銅戈、銅釧、勾玉、管玉などが多く出土した（図6）。近年、墓地の時期変遷が明らかにされている（仁田坂・美浦編2014）。それによると、Ⅰ期（伯玄式）では墓域の中央付近に数基ずつ群集して分布している（図6の黒塗り）。このうち88号甕棺は板付Ⅰ～Ⅱa式に遡る可能性が示されており、そうすると、宇木汲田貝塚のⅥ層



図5 宇木汲田遺跡全体図および調査地点

(弥生時代前期の貝層)に時期的に対応することとなる。その後、II期(金海式)に墓域が大きく広がり、III~VI期(城ノ越式、汲田式、須玖式、立岩式、三津式)にかけて墓群が形成されている。墓域は東西に大きく分かれており、西群にのみ青銅器を有する墓が存在するなどの差異が認められる。一方で、宇木汲田貝塚のX、IX層(刻目突帯文土器単純期の貝層)に対応する時期の墓地として

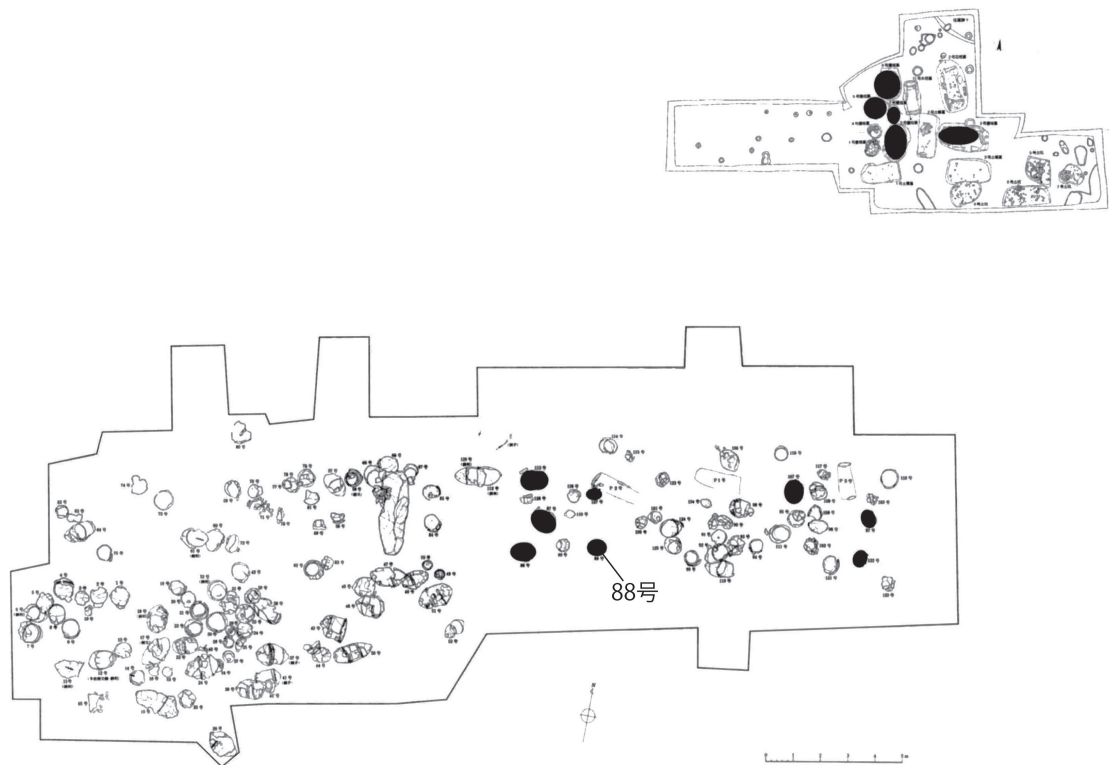


図6 宇木汲田甕棺墓地遺構図（黒塗りがI期相当）

は、貝塚の南西の丘陵上に位置する森田支石墓群、瀬戸口支石墓群が挙げられる。森田支石墓群では、日仏合同調査において支石墓の確認、測量が行われ、全16基のうち、1号支石墓のみ下部構造の確認を行った。また甕棺墓一基が確認されている（伊藤・高倉1982）。1995年の九州大学の調査によって、数基の下部構造が明らかになり、4号支石墓では夜臼単純期の小児棺が検出された（九州大学文学部考古学研究室1997）。2005年には重要遺跡範囲確認調査が唐津市教育委員会によって行われ、日仏合同調査時に撤去された1号支石墓を除く15基の上石を確認した（図7）（草場2007）。瀬戸口支石墓群は、森田支石墓群の北側に隣接する半独立丘陵上に位置し、これは宇木汲田甕棺墓地のほぼ真西にあたる。1957年に佐賀県教育委員会による発掘調査が行われ、14基の支石墓が調査された。これらのうち、1号支石墓では夜臼式の深鉢（上甕）と壺（下甕）による小児棺、13号支石墓では夜臼式の壺（下甕）と同型式の深鉢（上甕）による小児棺が検出された（渡辺1982c）。2005年には、森田支石墓群と併せて、重要遺跡範囲確認調査が唐津市教育委員会によって行われた（草場2007）。さらに2012、2013年にも唐津市教育委員会によって調査が行われ、丘陵頂部全体が発掘された。結果、1957年に調査された支石墓に加え、5基の小児棺墓が確認された（図8）（仁田坂・美浦編2014）。

5. 宇木汲田貝塚と水稲農耕

宇木汲田貝塚のX層は夜臼I式単純期であり、土器内面付着炭化物の年代測定などからすると、紀元前9～前8世紀に相当する（宮本2017）。紀元前1千年紀前半にはいくつかの寒冷期が知られているが、前9世紀後半から前8世紀前半もその一つであり、これを背景に、水稲農耕を伴って渡来人が、朝鮮半島南江から壱岐・対馬を経て唐津平野に流入したと考えられている（宮本2017）。こうし

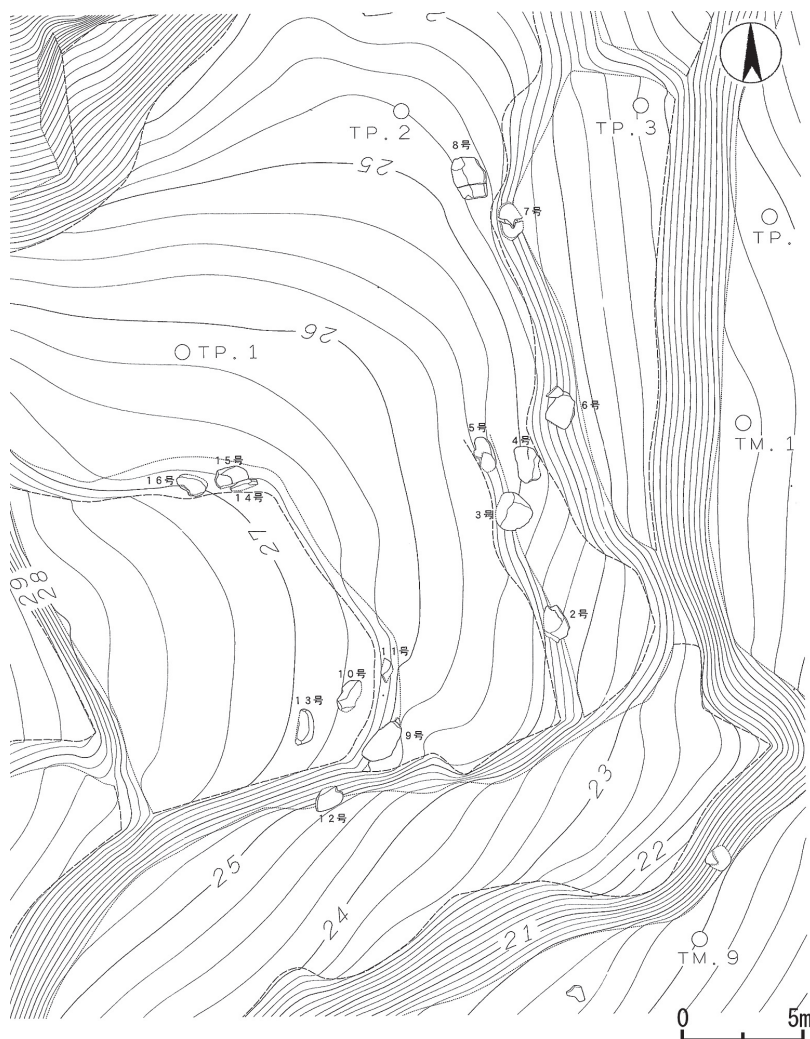


図7 森田支石墓群 地形実測図

た、弥生早期における半島南部との文化接触については、二重構造モデルが唱えられている（宮本2013）。それによると、二重構造の第一段階は、本貝塚のⅩ層の時期である夜白Ⅰ式期に相当し、湖南地域から南江流域までの海岸から対馬の浅茅湾を経由し、玄界灘沿岸西部に至ったとされる。この段階では、渡来人介在の可能性はあるものの、支石墓などの文化要素の受容は点的で一過性に留まっており、在来縄文人の主体的な選択、模倣が存在した。

本貝塚のⅨ層は最も多くの土器を出土しており、夜白Ⅰ式に加え夜白Ⅱ式も見られるが、板付式は含まない（宮本2018）。この時期に相当するのが、夜白Ⅱa式以降の上記二重構造モデルの第二段階である。この段階では、洛東江中・下流域の嶺南地域から対馬北部を経由し、玄界灘沿岸東部を中心とする文化波及が認められる。ここでは渡来人を伴いつつ、木棺墓（土壙墓）や松菊里型住居が伝播し、福岡平野を中心として持続的な文化接触が行われた。その中で板付式土器様式が成立し、この土器様式が西日本へと拡散していくこととなる。また第一段階同様、第二段階も寒冷化（前670年頃）と対応しており、渡来人の動きをけん引したと考えられている（宮本2017）。

【図版出典】

図1 井関1982-第4図を転載



図8 瀬戸口支石墓群 地形実測図

- 図2 小松・美浦2008-図1を転載
- 図3 国土地理院電子地形図25000を加工
- 図4 国土地理院電子国土webを加工
- 図5 田崎1986-第3図を、仁田坂・美浦編2014-fig.4-37に基づいて加工
- 図6 仁田坂・美浦編2014-fig.4-50を加工
- 図7 草場2007-fig.20を加工
- 図8 仁田坂・美浦編2014-fig.4-25を加工

【参考文献】

井関弘太郎1982「末盧の地形と地質」『末盧国 佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究』六興出版、7-17頁

伊藤奎二・高倉洋彰1982「森田支石墓群」『末盧国 佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究』六興出版、235-239頁

岡崎敬1982a「触角式有柄銅剣」『末盧国 佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究』六興出版、200-205頁

岡崎敬1982b「山本遺跡」『末盧国 佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究』六興出版、339-340頁

- 岡崎敬・木下尚子1982「桜馬場遺跡」『末盧国 佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究』六興出版、343-355頁
- 岡崎敬・本村豪章1982「島田塚古墳」『末盧国 佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究』六興出版、506-511頁
- 小田富士雄1982「横田下古墳」『末盧国 佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究』六興出版、498-502頁
- 亀井明德・永井昌文1982「谷口古墳」『末盧国 佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究』六興出版、478-495頁
- 唐津市教育委員会1982『菜畑遺跡』（唐津市文化財調査報告第5集）
- 唐津市教育委員会1987『双水柴山遺跡』（唐津市文化財調査報告第20集）
- 唐津市教育委員会1991『千々賀古園遺跡』（唐津市文化財調査報告第46集）
- 唐津市教育委員会1992『中尾ッ枝（2）』（唐津市文化財調査報告第50集）
- 唐津市教育委員会1995『湊松本遺跡』（唐津市文化財調査報告第62集）
- 唐津市教育委員会1996『梨川内村前遺跡（2）』（唐津市文化財調査報告第65集）
- 唐津市教育委員会1998『雲透遺跡（2）』（唐津市文化財調査報告第83集）
- 唐津湾周辺遺跡調査委員会1982『末盧国 佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究』六興出版
- 九州大学文学部考古学研究室1997「佐賀県・森田支石墓の調査」『東アジアにおける支石墓の総合的研究』195-222頁
- 草場誠司2007『葉山尻支石墓群 葉山尻古墳2号墳 森田支石墓 瀬戸口支石墓』（唐津市文化財調査報告第134集）
- 小松讓・市川浩文・土屋了介 編著2010『中原遺跡Ⅳ』（佐賀県文化財調査報告書182）
- 小松讓・川副麻理子・大嶋健二・谷洋一郎・田中健一郎・兒玉洋志2006『大江前遺跡・目貫古墳群・赤野遺跡・袈裟丸城跡・岩根遺跡』（佐賀県文化財調査報告書167）
- 小松讓・美浦雄二2008「弥生成立期の地理的景観 佐賀県唐津市唐津平野にみる初期農耕集落の出現と拡大」『弥生文化誕生 弥生時代の考古学2』同成社、17-33頁
- 小松讓・美浦雄二・川副麻理子2007『中原遺跡Ⅰ』（佐賀県文化財調査報告書第168集）
- 小松讓・美浦雄二・辻村美代子・藤尾慎一郎・今村峯雄・坂本稔2003『梅白遺跡』（佐賀県文化財調査報告書第154集）
- 小松讓・藁科哲男・田村朋美・杉山和徳・吉野進一 2012『中原遺跡Ⅵ』（佐賀県文化財調査報告書193）
- 小松讓・草場誠司・美浦雄二・辻村美代子2000『堂の前・井ゲタ遺跡』（佐賀県文化財調査報告書第144集）
- 佐賀県教育庁文化課 1974『萬麓・寺ノ下遺跡』（佐賀県文化財調査報告書第29集）
- 佐賀県教育委員会1980『柏崎遺跡群』（佐賀県文化財調査報告書第53集）
- 陣内康光2008『竹の下古墳群』（唐津市文化財調査報告第143集）
- 杉原荘介・戸沢充則1971「佐賀県原遺跡における細石器文化の様相」『考古学集刊』44、1-28頁
- 田崎博之1986「唐津市宇木汲田遺跡における1984年度の発掘調査」『九州文化史研究所紀要』31、1-58頁
- 田島龍太・美浦雄二2013『宇木汲田遺跡』（唐津市文化財調査報告第163集）
- 中島直幸1982「久里大牟田遺跡」『末盧国 佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究』六興出版、335-339頁
- 仁田坂聡2004『天神ノ元遺跡（3）』（唐津市文化財調査報告第114集）
- 仁田坂聡・美浦雄二 編2014『末盧国遺跡群 総括報告書』（唐津市文化財調査報告第168集）
- 佐賀県教育委員会1978『生石・森の下遺跡』（佐賀県文化財調査報告書第43集）
- 堀川義英1981『田尾遺跡群 磯道遺跡』（肥前町文化財報告書第1集）
- 松岡史・森醇一郎1982「海底遺跡」『末盧国 佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究』六興出版、53-62頁
- 三浦雄二・戸塚洋輔・藤原理恵2010『仁田古墳群1区・2区・3区・矢作遺跡4区・下新田古墳群・大坂古墳群』（佐賀県文化財調査報告書183）
- 宮本一夫2009『農耕の起源を探る—イネの来た道』吉川弘文館
- 宮本一夫2017『東北アジアの初期農耕と弥生の起源』同成社
- 宮本一夫2018「弥生時代開始期の実年代再論」『考古学雑誌』第100巻第2号、1-27頁
- 宮本一夫編2001『佐賀県大友遺跡』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
- 宮本一夫編2003『佐賀県大友遺跡（2）』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
- 宮本一夫・田島龍太編2009『久里双水古墳』（唐津市文化財調査報告第95集）
- 宮本一夫2021「伝小郡出土東周式銅戈について」『持続する志 上 岩永省三先生退職記念論文集』中国書店、

193-214頁

渡辺正気 1982a 「五反田支石墓」『末盧国 佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究』六興出版、225-228頁

渡辺正気 1982b 「葉山尻支石墓」『末盧国 佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究』六興出版、228-234頁

渡辺正気 1982c 「瀬戸口支石墓」『末盧国 佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究』六興出版、221-225頁